

# 紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 目 次

## 序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕 .....	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 .....	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕 .....	252

## 近江へのアプローチ・その3

－野洲・栗太をフィールドに－

### 近江歴史クラブ

細川 修平・内田 保之・畑中 英二・大道 和人

神保 忠宏・重岡 卓・中村 智孝・鈴木 桃代

我々の活動も無事「三日坊主」の域に達したかと、自画自賛するとともに、光陰矢の如しを実感する日々である。3年間の活動によって我々は進歩したのであろうか。

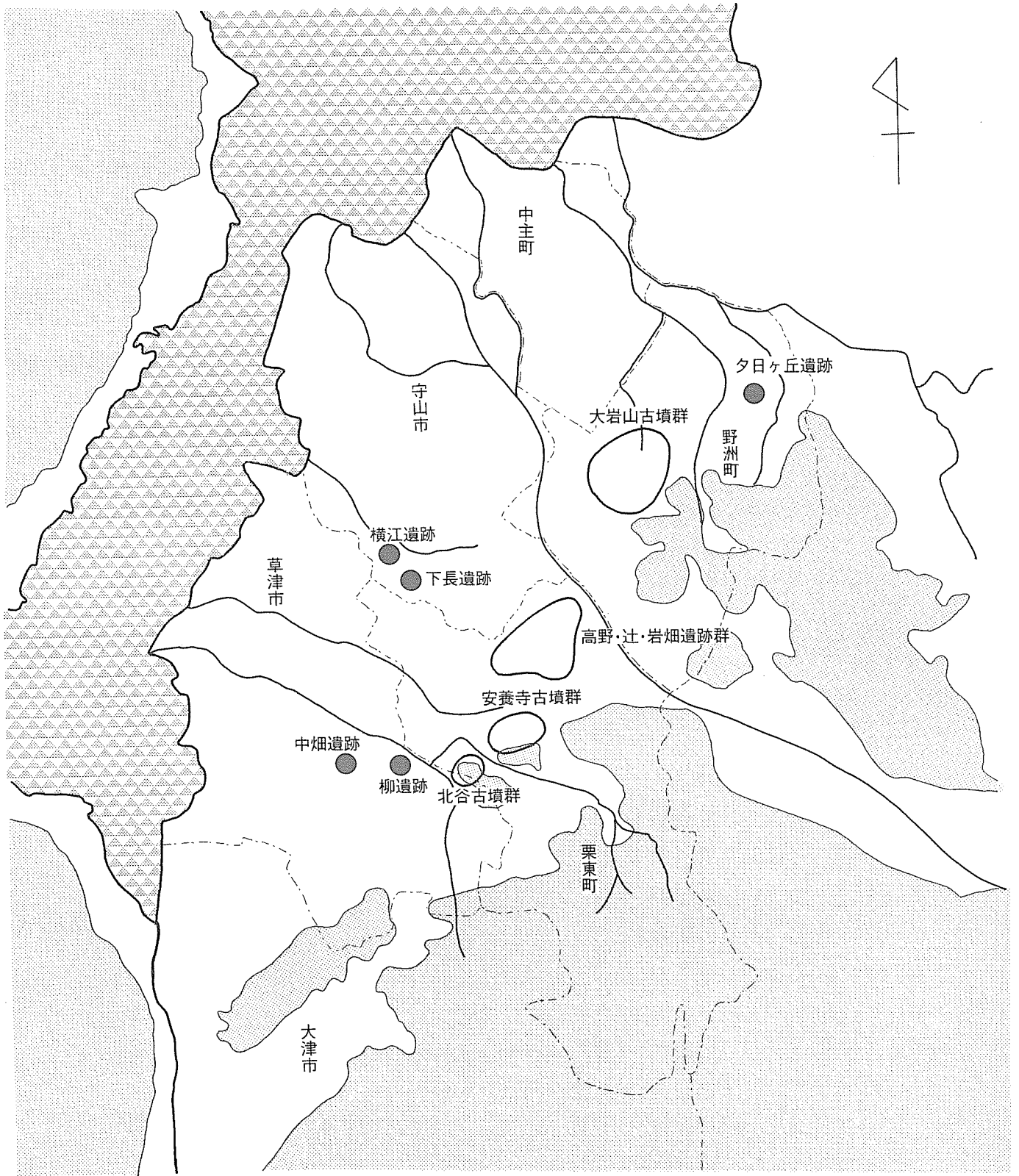
思い起こせば3年前のある日、某大学の研究室まで「高島郡」の航空写真を見に出かけたのが活動の始まりである。写真を見ながらあれこれと語り合いつつ、問題点を探り、実際に高島郡までドライブしたり、一つの地域における古墳時代から古代（奈良・平安時代）にかけての画期を見出そうと試みたのが、我々の第1作である。

この1年目の活動によって、いくつかの画期を設定することには成功したものと考えているが、半面「領域支配」という大きな壁にぶつかったのも事実である。古代国家成立史へのアプローチという視点を持ち続ける以上、この領域支配の問題は避けて通る事のできない課題であり、考古学的に何等かの目処を立てておきたいと念願するに到った。そこで2年目、古代の領域支配の基礎単位である「郡」に注目し、近江において最も不自然と考えた「神崎郡」の成立を追求した。

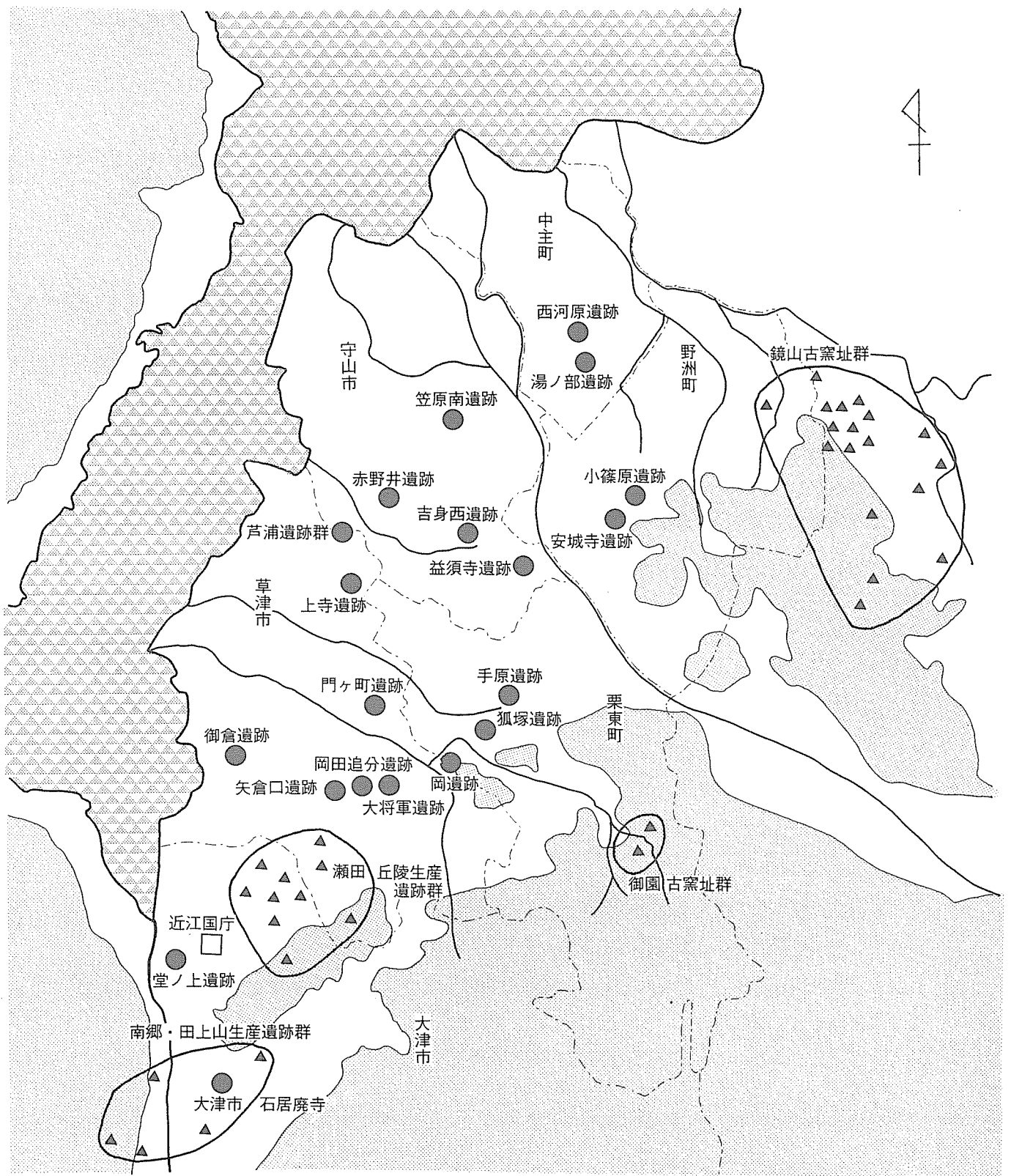
特に、歴史地理学専攻の仲間を新たに迎えることによって、郡内の集団設定を地理学的に一定以上の精度をもって行うことに成功した。その結果、領域支配の問題は依然遠い彼岸にあるが、少なくとも、地域集団の積み上げからは領域は見えてこない点は明らかにし得たと考えている。そして、ここに我々なりのフィールドワークの方法論が確立できたと自負している。

3年目の今年は、フィールドワークの成果を歴史の中に一般化することを目的として設定した。逆説的に、一般化する思考の中から領域支配の問題が見えるのではないかという淡い期待とともに、我々の目標は地域にあるのではなく、あくまで「歴史」そのものに存在すると言うことを確認したかったためでもある。そこで、近江において最も複雑かつダイナミックに歴史の変動を受けたと予想される野洲・栗太両郡をフィールドと設定した。また、今までの方針とは異なり、思考のスタートはフィールドに存在するが、思考の過程については、全くフィールドにはこだわらないものとした。各々が「歴史」への道程を模索せんがためである。

以上の様に大風呂敷の3年目ではあるが、はたして目的のいかほどの部分が達成できたか、いささか不安を感じるころではある。しかし、こうして今年度も成果を発表することができた点が最大の成果である。皆様の忌憚りの無い御意見、御指導をお願いし、また、我々の糧としてゆきたい。



第1図 栗太・野洲郡 6世紀までの主要遺跡



第2図 栗太・野洲郡 7世紀以降の主要遺跡

## 祀る・葬る

ここでは、栗太・野洲における古墳を分析対象とした。

鈴木論文は、古墳時代前・中期を扱ったものである。この論考においては、古墳時代、前期・中期を通じて、一列のこの地域の首長墓系譜の存在を考え、この地域を一つの存在として把握する方法を提示したものである。さらに、前期においては、野洲を中心とする地域における三角縁神獣鏡の傑出と、栗太における石製腕飾類の傑出という副葬品における個性を認めるという立場に立脚し、地域が副葬品に現れるような機能に分割されていたと推定した。そして、そうした分割の延長として新開1号墳の豊富な副葬品を示唆してみた。すなわち、栗太・野洲を一つの地域としてまとめて扱う正当性を指摘するとともに、そのまとまり自体は特殊な内容を伴っていたものと考えたものである。

細川論文も、基本的には鈴木論文での指摘を継承する形で、後期古墳を分析したものである。後期古墳の類型化から、水系などの造墓集団からは理解しがたい古墳群を指摘し、政治色の強い古墳群、特殊な生産と関係する古墳群、特殊に編成された集団の古墳群など、「地域における二極分化」ではない、新しい「システム」に立脚した古墳の造営を想定した。そして、そうした「システム」に立脚した集団と従来の「水系などを単位とした集団」とが、互いに石室技術を交流させ、かつ須恵器の副葬など同一の造墓イデオロギーの中に、等質的にかつ没个性的に編成されることこそ後期古墳の本質であると考えた。従って、この段階に極めて政治的色彩を発揮する大岩山古墳群についても、従来の「地域首長」と考えるものではなく、「システム」的に編成された新しい首長の姿を考えることが可能であろう。

このように、古墳時代を通じて、栗太・野洲は一つの地域として理解することが可能であるが、後期に大きな画期が存在するのである。これは古墳が「システム」色の強い存在に変質する画期と言い換えることができるだろう。そして、こうした「システム」化する背景には、前期に認められた、地域の機能的な分割に起因するものかもしれないと考えている。後期への画期の先駆けとなる「古式小古墳群」の問題とともに、今回の作業においては深められなかった問題である。今後の課題としておきたい。

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀要第9号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668